

東日本大震災  
被災地での短いボランティア活動に関する報告



2011.6.20 非営利自治支援事務所 Pucca

石田 英人

## はじめに～東日本大震災の概要

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災は、人的被害に限っても20都道県（西は高知県まで）に及び、主な被災地での死亡・行方不明者は、宮城県14,225人、岩手県7,392人、福島県1,984人、全国合計で23,670人にのぼっている。<sup>1</sup>

地震の規模はマグニチュード9.0<sup>2</sup>、最大震度は宮城県栗原市震度7、宮城県名取市、登米市、大崎市など、宮城県、福島県、茨城県、栃木県の4県28市町村で震度6強を観測した。<sup>3</sup>

図1 被災地の状況（北海道新聞 2011.5.22より）

マグニチュードは日本では過去最大、最大震度は1995年の阪神・淡路大震災、2004年の新潟県中越地方地震と並ぶ。今回の震災の特徴は、津波による大きな被害である。

例えば、今度の地震での死亡者は15,327人であるが、震度6強以上を記録した28自治体中15の自治体が死亡者10人未満である。このことは、地震による死亡者の多くが、通常の地震では最も多い、建物の崩壊、物の落下などではない理由で亡くなっていることを示している。<sup>4</sup>

また、死亡者が発生している地域が北海道から茨城県にわたっている広いということも、津波による被害の甚大さを示している。



1 「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」H23.6.2警察庁発表(4月7日に発生した宮城県沖を震源とする地震、4月11日に発生した福島県浜通りを震源とする地震、4月12日に発生した福島県浜通りを震源とする地震及び5月22日に発生した千葉県北東部を震源とする地震の被害を含む)

2 「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」について(第28報)H23.3.25気象庁発表

3 「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」について(第8報)H23.3.12気象庁発表。

4 阪神・淡路大震災の死亡者の死因の77%が圧死・だったのに対し、東日本大震災の死亡者の死因の92%が水死である。

## 1 被災地の状況 (5月23～27日)

被災地へは、復旧し始めている仙台港へ向かう苦小牧発のフェリーで向かった。

5月22日(日)19時苦小牧発、仙台には翌日9時30分到着である。

仙台港はかなり復旧が進んできているようだが、周辺には点灯していない信号も多く、津波にのまれた車両で放置されているのも多くあり、その被害の大きさがうかがえる。近くには、新しそうな高級家具の展示販売施設があるが、そこは本震の揺れと津波、そして大きな余震による被害で、このまま閉店すると噂されているらしい。

1日目の活動場所である石巻市へは多賀城市を經由して入る。その多賀城市は、行政区域としては海に面していない。しかし、仙台港の背後地にあるため2～4mの津波に襲われ、市内で186人(5月22日現在)の死者が発生している。

### 【1日目(5月23日) 石巻市】

石巻市では、親戚に紹介されたお寺の復旧を手伝った。

寺は、港からおよそ500mの位置にあり、1階部分(2m50cmはある)は完全にヘドロで埋まり、それを全て掻きだすのに1ヶ月半～2ヶ月かかったということである。

ところで、石巻市に入ってきて最初に目についたのは、小学校(中学校?)のグラウンドに設けられた土葬の墓地であった。石巻市の火葬場の能力が追いつかず、やむを得ずいったん土葬し、後にあらためて火葬することになったのである。

なお、親戚の話では、その後、DND鑑定などのため埋葬するペースが落ち、火葬場の能力が間に合いだしたので、現在は土葬されていないとのことだ。

寺へ向かう海岸沿いの様子は、ちょっと言葉にならない、まるで戦争があったかのようである。

親戚の話では、これでも大分片付いた、

仙台港の状況



墓標や献花が見える



残骸が道路脇に寄せられて、道路が出ているのだから1ヶ月前よりずっとマシだよとのことである。

確かに、真新しい電柱が目につき、徐々に復興している様子がうかがえる。しかし、この付近はまだ電気はもちろん、水道、ガスも復旧していない。

お寺の人に話を伺うと、お寺の水道は、関東方面から水道関係の人が来て配管を繋いだようだが、話を聞くとどうも怪しいところがあって（後で法外な工賃を請求するとかではなく、繋いだやり方に）市の確認がないと使う気になれないとのことである。

石巻市にこのことについて確認はしていないが、少なくとも被災地から応援を求められた者は、自らの費用で、自身の身分と連絡先、そして石巻市との関係を明らかにした帳票等を用意するなどして、被災地の人に不安を与えないようにすることが必要なんだと思う。

休憩時に通りを眺めていると、「支援物資配送中」と張り紙した宅配便のトラックが来た。お寺の台所（だった所）には、ペットボトルの水やコンビニに売っているようなおにぎり、大手メーカーのパン、カップ麺などが箱やケースであったので、それらが配給されているようだ。お湯は、カセットコンロで沸かしていたか、発電機から電源を取ってポットで沸かしていたか不明である。

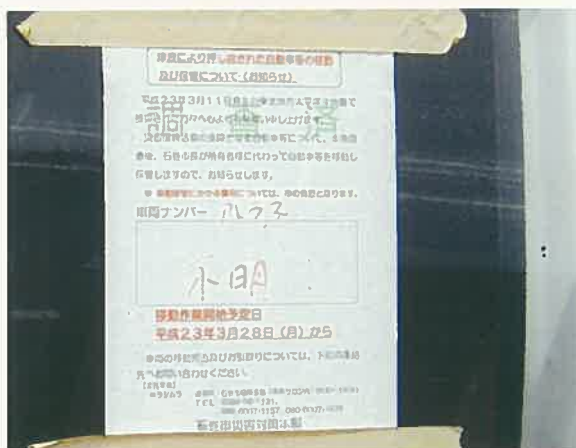
右の写真は、津波でさらわれた車両に貼ってあった告知文である。市が調査し、いつからここから撤去する作業を始めるか記してある。予定では3月28日からとなっていたが、手が回らないようだ。



被災したお寺。ブルーシートの部分は壁がない



コンテナが住宅の屋根の上に...



この日は、寺の内壁を剥がし、中のグラスウールを引き出すなど、大工さんの手伝いをした。大工さんの話だと普通なら一人でやる仕事じゃないんだけど、いつも一緒にやっているもう一人も、他の現場を一人でやっているの仕方ないとのことである。材も頼んでいたのがなかなか来なくて、最近やっと集まった、でも、やれる人は俺しかいないんで、終わるのは秋かなあと苦笑していた。

大工さんは、近くの日和山（丘のような低い山）に避難したのだそうだが、初めは津波が来ているのが分からなく、細かな霧みたいのが飛んで来て津波と気づいて逃げたとのことだ。日和山から町を見ると様子がよく分かるが、町の中にいたら気づきにくいだろうとのことである。

お寺に手伝いに来ていた方の話では、この辺でも逃げ遅れて亡くなった人も多いとのことだ。中には、引き波で握っていた子どもの手を離してしまい、自分は助かったが子どもは行方不明、その瞬間の手の感触が忘れられないと泣いて話す母親も居る、今後はこの辺りには誰も住まないんじゃないだろうか（工場等は残っても）と話していた。

また、当のお寺の住職も、指定されていた避難所にいなかったもので、檀家さんの間で「住職が亡くなった」としばらく噂になっていたくらいとのことである。

震災後、避難所と親戚宅などに別れて暮らしている家族も多いそうで、津波のことを考えれば「ここにはもう誰住まないだろう」というも決して大げさじゃないと思う。

右壁のうっすらと色の違うところまでヘドロ



津波に耐えてカボチャは育つ



## 【2日目（5月24日） 山元町】

被災地へ来るボランティアは、テントや車中泊も多い。

私は、宮城県白石市に親戚がおり、そこを拠点にして行き先を選んだ。

2日目からは、親戚からの情報もあり、白石から車で3、40分の距離にある宮城県山元町に行くことにした。（車は親戚から借りた）

前日に山元町のボランティアセンター<sup>5</sup>（以下「VC」とする）に電話し、受付時間などを確認する。山元町は受付が8時半から9時半、活動は16時までということであった。（最近VCのブログを確認したところ8時から10時受付、活動は15時半までとなっていた）

当日の9時に役場に到着し、受付する。

受付は、役場横のテントであり、後ろにプレハブの待機所がある。受付簿には、住所、氏名、電話番号とボランティア保険加入の有無、技能を書き込む。ボランティア保険は100円で自治体が負担してくれ、加入証をもらう。この保険は、県内のどこの被災地での活動にも有効であるとのこと。

技能は特にないので空欄。

受付が済むと、腕章と名前を書いて腕章に貼るように布テープが渡され、待機所で待つ... が、すぐにVCの人に名前を呼ばれ行き先も告げられずにあたふたと7人乗りの車に載られて出発する。

同乗者はどこかの大学のスポーツ部（陸上?）のようで女性も一人いた。女性がい

山元町 HP から

## 宮城県



山元町役場



支援先のイチゴ農家



<sup>5</sup> 被災地の自治体は、インターネットでボランティアの受入れ情報など関係情報を発信している。  
参考：宮城県災害VC（各自治体のVCへリンク） <http://msv3151.c-bosai.jp/>

るのは別に珍しくない。

運転の人が（VCの人か役場の人か地元のボランティアの人か分からない）、「これから行くところは、イチゴ農家です。今日は日差しが強いですが、ビニールハウスの中での作業になるかもしれない、大変かもしれません」とだけ説明があった。

支援場所につくまでの道路は、国道を途中で外れて海へ向かう。間もなく目の前に水田が広がるが、そこには壊れた車、家具、その他さまざまなモノが散乱している。おそらく今年は田んぼはやらないのだろう。というより、海水を被ったことから、数年間はできないのではないだろうか。

到着すると、先に8人くらいのグループが作業を始めていた。ここの農家さんの簡単な挨拶と説明があり、ハウスの中の土砂やガレキ（海の砂）の掻き出しは終わっているの、今日はハウス周囲のヘドロ<sup>6</sup>やガレキの撤去をお願いしたいとのことである。

作業は、後から来たボランティアを含め20人位で行った。ヘドロの下は大切な土である。ヘドロは土の上に1～2cm位の厚さで堆積していて、なるべく土を削らないようにヘドロのみをスコップでこそげとる。

こそげた土は、数カ所に山にしてそれを一輪車で一カ所に捨てに行く。

今日は、一日中その繰り返しである。

ハウスとその背後の防風林の周囲には、海からのヘドロばかりでなく、杉などの枝葉、本、ノート、家具、資材など様々なものが堆積、散乱している。ここは海岸から1kmくらいの場所だそうだが、津波は様々なものを飲み込んでここに襲来したのだということが分かる。

母屋とイチゴのハウス。トラックはどこから...



上の写真に写っていない右端のハウスは崩壊している



土砂とガレキなどの山。後でどこかに運ばれる。



<sup>6</sup> ヘドロとは、一般的に海などに堆積した汚染物質などを含んだ泥をイメージするが、砂浜で大きな工場もなく、そんなに汚れたイメージのない山元町の海からの土砂でも、現地の人「ヘドロ」と言うので、それに従って表記する。

強い日差しの中、午前中は屋前に1回、午後からはおよそ1時間おきに休憩を取りながら作業は続けられた。休憩時に、農家さんが飲物を出してくれる。

作業するのに、下は綿のズボンの上に薄いナイロン生地で裏地にメッシュのズボンを履き、上はTシャツの上にナイロンのヤッケを着た。頭にはタオルを巻き、ゴーグルをして防塵マスクをしたが...

ゴーグルは付けた瞬間に外し、防塵マスクも作業開始10分で外してしまった。ヤッケも15分も着てられなかった。

とてもじゃないけど、苦小牧育ちには無理である。

昼食時に、農家さんに写真を撮る許可をもらい、その時、少し話をうかがった。

津波は1階の部分を水没させたようだ。

ご主人は、ここの四代目で、イチゴをやる前はこの家の2階でカイコを飼っていたそうである。家は、建ててから100年以上経っているものだが、こうなってはもう壊すしかないだろうと話す。

山元町はイチゴの産地<sup>7</sup>で、イチゴ農家が100数軒<sup>8</sup>があるけど、被害を受けなかったのは山の方にある2軒だけだった。自分のところは、ちょうど出荷が始まった頃だったが、ヘドロがハウス内に大量に入り掻きだすには2ヶ月位かかったということである。

イチゴの栽培は続けるそうだが、塩害があるかもしれないし、地下水も検査しないとならない、ダメなら水道水を使うしかな

周囲の様子。倒れたコンクリートの標識のそばに誰のかわからないアルバムが置いてあった。



<sup>7</sup> 北海道にも「仙台イチゴ」というブランド名でたくさん入っている。

<sup>8</sup> 「この地区内で」ということだと思われる



いという。

水道水なら、余計経費がかかってしまうだろうなあと素人ながら心配になった。

どこから来たの?と聞かれたので、苫小牧からと答えると「それはそれはご苦労様です<sup>9</sup>」と笑顔で言われ、恐縮した。

話していると、どうしても家族のことが気になる。興味本位で気になるわけではないのだが。しかし、これだけの津波、誰か亡くなっているもおかしくないのだから、訊くわけにはいかないと思う。

「離れに子ども達家族がいたんだけどね、とりあえずみんな無事で。でもバラバラに暮らしているよ。しかたないけどね」

ホッとした。このまま「あの人の家族は無事だったのだろうか」と思って帰るのはつらかった。きっと農家さんも、それを感じて話してくれたのではないかと思う。

役場へ15時半までに戻らなくてはならないということで、15時で切り上げ、農家さんも一緒に集合写真を撮って終了した。

こういうことは、傍から見れば「被災した人のことを思えばそんな記念写真のようなこと...」と思えるのかも知れない(私も一瞬そう思った)。しかし、きっと「また立ち上がる」という強い意志を持った人には、こういう写真も「悲しい思い出」ではなくて、「ボランティアとの出会いの記念」と受け止めているのではないかと思う。少なからず哀しみもつきまとうわけだが。

ガレキ等の撤去は、完全に終わったわけではなく、まだ防風林の周囲にはモノが散乱していた。完全にきれいにするには30人でも足りなかったと思う。山元町には、まだまだこういうところがあるようだから、ボランティアはいくらいても多いということはないはずだ。(VCの対応能力にもよるが)

帰路の車中、運転の人が「自衛隊の大半がもう引き上げるって言うんですね... まだ、こんなにいろんなモノが散乱してるのに...。本当に感謝してるんだけど...」

役場に戻って腕章を返し、明日もここに来ることを心の中で決めて、白石に戻った。

### 【3日目(5月25日) 山元町】

前日のような出発の仕方は例外だったらしく、この日は受付から現地向かうまでの段取りをきちんと知ることができた。

受付終了後、ボランティア用の待機所で待ち、やがて受付順に名前を呼ばれる。グループで行動している場合は、受付が2カ所あるので同じところに並び、初めに受付した人がグループ名と人数を申告しておけば、全員同じ場所に派遣されるようだ。

<sup>9</sup> ここの人達の「ご苦労様です」には「ありがとう」という意味も付いていて、私たちの使うねぎらいの意味だけではない。

この日は、5人の「おおつかさんのグループ」と一緒に行動することになった。

プレハブ横の用具置き場の横で、一緒に行くメンバーが紹介される。(と言ってもVCの人が「こちらは、おおつかさんのグループと石田さんですね。今日は、6人で一緒にお願いします」というだけ)

次にVCの人が、行き先と大まかな作業内容を説明し、誰かリーダーを決めてくださいと言い、リーダーには派遣先の名前や所在地を書いた紙が渡される。リーダーは「おおつかさんのグループ」なので、当然おおつかさんに決定である。

派遣先へ向かう車は、よその町の社会福祉協議会(以下「社協」)から貸し出されている車とメンバーの車の合計2台である。スコップや一輪車など、作業内容に合わせて道具を選んで車に載せ出発する。

今回の支援先は水田農家である。海岸から1.5km位の場所にあり、ご高齢の夫婦世帯で、田んぼや家の周りのガレキ等の撤去を望んでいるとのことであった。

着いて挨拶し、お話を聞くと、家の周りより5枚ほどある田んぼの中に流れ込んだトタンなど建物の残骸、様々な機具、家具、生活用品やガレキの撤去をお願いしたいとのことであった。ガラスも多く流れ込んでいて、自分たちでもたくさん集めたけど、まだ残ってるから注意して、とのことである。

家の周りを見ると、随分様々なものが流れて来た様子がわかる。すごい量で、これは大変だったと思う。

田んぼに向かうと、トラクターの大きな部品が見える。

5枚ある田んぼをどうやってやっていくか、リーダーのおおつかさんの提案にみんな合意して作業開始である。田んぼには、大きなビニールや漁網など、農業、漁業に関係するものから、ビールやワインのビン、食器、カーテンレール、本など普段の暮らしのにおいがするものまでが落ちていて切なくなる。

拾ったものは、大雑把に金物、ガラスなど割れ物とビン類、その他にわけながら一カ所に集める。いずれ重機が入って回収されるそうだ。

自分の体格を考えて、大きなモノを中心に拾っていたら、何となく熱い視線を感じた。

顔を上げると、さっきのトラクターの部品のところに3人集まりこっちを見てる。

「さては」と思い、走って行くと「きたきたきた！」

3人とも、私を呼びたかったけど名前が分からないので「こっちに気づかないかなあ」と思っていたようだ。

「コレ、外に出すの？」と聞くと、「いや、それは後で重機で持ってくんやけど、周りにひっかかっている布やビニールをね、取ろうと思うてね」とおおつかさん。おおつかさんは関西から来ているようだ。

4人で一度ひっくり返し、その後2人が揺らし、2人が布を引っ張ってどうにか外す。

「取れたー！」と4人で笑う。なんか「いい感じ」である。

1時間半ほど作業して休憩。おばあちゃんが飲物とお菓子を持って来てくれる。みんな「気を使わないでください」と言いながら、素直にありがたくいただく。お菓子の中に「先代銘菓 萩の月」が入っていたが、「あら、ごめん。人数分ないね」とおばあちゃん。

隣の亘理町から来ている人が遠慮し、県外からの4人が優先していただいた。

「これって、似たお菓子があちこちに作 「萩の月」。写っていないが右の田んぼには壊れた車が。られるようになったね」

「なんか、社長が自信家で『同じ味作れるものなら作ってみろ』って特許だかなんだか取らなかつたらしいよ<sup>10</sup>」

「『支笏湖の月』ってのもありましたよ。昔、それを何箱か買ったらエージレスが入っていないのがあって傷んでいて、苦情を言って返品したら『洞爺湖の月』ってのが送られて来たんですよ。『違うものが届いたんですが...』って電話したら『パッケージが違うだけなんです』って...」



そんな話をしながら、おおつかさんの「じゃあ、やりますか」という声で、お昼までもうひと頑張りである。

お昼は、私は親戚がお握りを持たせてくれていたが、他のみんなはお弁当を買いに行くと言っていた。昼の休憩時に、買いに行こうとしたらおばあちゃんが「コレ、食べて」とお弁当を差し出した。<sup>11</sup>

みんな驚いて「いや、そんなことまでしてもらっては...」と大恐縮しつつありがたく受け取る。他に、具沢山の味噌汁（一つのお椀に卵一個入り！）やお漬物、それに筋子まで。

関西のおおつかさんが、筋子を指してメンバーの一人に「これ、何？イクラと違うの？食べてみて」と。先に私が一口いただく。粒は小さめだがとても美味しい。

関西では筋子は一般的じゃないらしい。

北海道人として、イクラと筋子の違い、イクラの作り方を講釈しておいた。

昼食後、周囲を歩いてみた。

建物の残骸は道路からは無くなっているが他はほとんど手つかずである。

<sup>10</sup> 噂である。検証していない。

<sup>11</sup> 本当に特異な例。もちろんですが期待してはいけません。(笑) 現地について挨拶した時に、おばあちゃんから「お昼は？」と聞かれて、「後でコンビニに行きます」と答えていた。それを聞いておばあちゃんが買って来てくれていた。ちなみに「お昼は？」と聞かれた時に、まさか買って来てくれるなんて思っていなかった私は「おにぎりあります」とも言っていなかった。なので私の分まであり、大大恐縮である。

住宅や住宅のそばに集められたガレキには、赤や黄色の旗が立っている。

後から調べてみると赤は建物もガレキも一緒に撤去して欲しい場合、黄色はガレキのみ撤去、両方そのままでもいい場合は緑の旗を立てるとのことだ。しかし、見かけるのは赤ばかりだった。私は、緑の旗を見ことはなかった。

この撤去は町が行うことになっている。

近くに線路が通っていて、何気なくそっちの方に向かって気づいた。レールが無い、向こうの踏切部分から切れている、枕木もない。

この線路は、これから再び同じ場所をとすか、もっと山側をとすか議論になっているらしい。津波を考えれば山側をとすのが正解なのだろうが、住んでいる人達の利便性や新たなルートを開設する経費などの問題もある。

亘理町から来ている人の話では、山元町の復興ペースは、亘理町と比較して1ヶ月くらい遅れている感じだという。理由は、亘理町より人口に比べて土地が広いということや、行政のリーダーシップなどの関係があるのかもしれない<sup>12</sup>と話していた。

午後からは、残っている大物を除去し、田んぼの中の「ヘドロに埋まっている、土に還らないもの（ビニールとか）」を拾い出し、最後に側溝にはまっているものを引っ張りあげることになった。

あらためて、プラスチックやビニールなどの環境に対する「違和感」を感じる。ゴミ



線路が途中から... 向こうに電車らしきものが見える



<sup>12</sup> 人口は亘理町（約 35,000 人）、山元町（約 16,000 人）であるが、震災による死者数は、亘理町（254 人 6/3 現在）、山元町（669 人 5/23 現在）である。人口に比較して死者が多いということは、行政職員が亡くなっている割合が高い可能性が高いし、地域のネットワークも寸断される。それによって、行政組織の立て直しなどに時間がかかり復興の立ち上がりに時間がかかった可能性もある。実際、別の支援先でボランティアの中からも「職員が足りないんです」という声があった。

としてそこにあると、紙や鉄、磁器などに比べて本当に「なんかひどい」「汚い」っていう感じがする。埋立て処分場に立ったことがありますか？ あの感じである。

朝からの作業には、農家のご夫婦もずっと加わっている。当たり前と言えれば当たり前かも知れないが、せっかくボランティアが来たのだから、作業は家の周りの軽いものにとどめて少しでも身体を休めてくれればいいのと思うのだが、やっぱりそうもしてられないのだろう。私たちにあれこれと気を使ってくれるし、側溝へも率先して入って手袋を泥だらけにしている。

側溝にはさまざまなものが落ちていた。自転車、スピーカー（最初は「金庫だ、金庫！」と騒いだ）、椅子などなど、そして真打ちは線路の枕木。

ヘドロと泥にまみれたそれらを引っ張り上げる。勢い余って後ろにひっくり返ったりしてみんなが笑う。引っ張り上げたけど、集積場所へ運ぶのが嫌で黙って顔を見合わせて譲り合って、吹き出したりする。

辺りの景色は悲しさで一杯だが、そこには不思議な連帯感が生まれてくる。

午後の休憩時に、おばあちゃんは今後のことをこんなふうに話していた。口数少ないおじいちゃんは何も言わなかったけれど。

「お米は、塩害で今年はもちろん作れない、5年くらい作れないって言われてるんだよね、でも5年後っていったらこの年でさあ…。でも、キレイにしておけばね、やっぱり、いつでもまたできるからね」

15時を過ぎたから、役場へ戻らなくてはならない。スコップ等を洗わせてもらい、自分たちの手袋や長靴も洗わせてもらう。

田んぼは、完全にキレイになったわけじゃないが、ご夫婦には本当に感謝される。

メンバーの女性は、おばあちゃんから「ほらほら、あんたこれ持って行きなさい、これも！」と残ったお菓子やらコーヒーやら持たされていた。

何度も何度もお互いにお辞儀して別れを言って、引き上げた。

VC場へ戻ったら、用具を確認して返却する。今回のところは、初めて行ったところらしく、状況をおおつかさんがVCの人に報告する。

今日一緒に行動した人達は、兵庫県神戸市、島根県出雲、茨城県土浦市、茨城県笠間市、山元町の隣の亘理町というメンバーでバラバラである。土浦と笠間の人は友人と一緒に来たらしいが、神戸、出雲、亘理の人は単独行動である。みんなは、前日に山元町で一緒の場所で活動して知り合い、仲良くなって、明日も一緒に行動しようということになって今日、こうしているということだ。

私は、七ヶ浜町に遠い親戚がいる。結婚式にも来てくれた人である。自宅は高台にあって無事だということだが、七ヶ浜町も大変らしい。

一度顔を見るのもかねて七ヶ浜町で作業し、状況によってはもう一度山元町に戻ろうかと思っていた。

解散時に、阪神・淡路大震災で被災した経験を持つおおつかさんがこう言った。柔らかな関西弁で。

「では、今日はこれで。みなさんお疲れさん。ところで、私たちは明日も山元町でやりますが、石田さんはどうされますか？」

ほんの一瞬だけ迷ったが、こう答えた。

「何かの縁だと思うので、明日もご一緒させていただきます」

#### 【4日目（5月26日） 山元町】

昨日のメンバーと9時にVC前で落ち合う。

今日は、23日とは場所は違うが、再びイチゴ農家である。

今日は大人数で20名で行動する。

VCの人が状況を説明し、「すでにイチゴ農家で作業したという方はいらっしゃいますか？」と訊いたので、私は手を挙げた。他にはいないようだ。

「では、すみませんが、リーダーをお願いします」

「ええ？」

断り様が無いので、そのまま決定である。

社協の軽トラを借り、一輪車などを積み込んで5台に分乗して出発する。私は土地勘がないし、ナビも積んでないので2番目を走る。支援先近くの農道で、白線のついたアスファルトが途中で分断され、アスファルト部分だけ道路の形状のまま道路本体と分離して畑の中へ向かっている。アスファルト部分だけを気にして走れば、そのまま畑に転落だ。津波の破壊力は凄まじい。

支援先に着くと、体格の良い、「おじいさん」と呼ぶにはまだ早そうな（孫はいそうだが）男性が待っていた。実はこの人は、ここの農家さんを手伝っている人で、今日の私たちの作業を指示してくれる、事実上のリーダーである。なので、私は「伝令」に職務変更である。

一輪車などを降ろそうとすると、昨日来たグループが明日も他のグループが来るからと言って、持って来た道具一式を置いていったという。VCとボランティアの引き継ぎがうまく行かなかったようだ。

やがてここの農家さんが来て、挨拶して、リーダーの男性（私じゃない）がてきぱきと指示をする。3、4名居た女性は別の細かな作業を指示される。

ここは前のイチゴ農家の時とは違い、倉

ヘドロ除去、清掃後のイチゴ苗ポットの収納庫



庫内のヘドロの除去と様々な資材の搬出、ヘドロを被ったマルチシートの撤去などが主である。また、倉庫か何かのコンクリートの基礎部分の破壊作業があったが、今日のメンバーの中に本職が3人居てハンマー使いも鮮やかに、あっという間に片付けてしまった。

こういうときに、「腕」を持っている人は頼りになるねえ。

倉庫からの重いモノを搬出する時は、誰が音頭をとるわけでもなく、リレー方式の搬出になる。使い慣れない台車についつい肥料袋を積みすぎて「ありゃ、動かない」と言って一同爆笑になる。

これは、志が同じ人達で生まれる一体感だ。これは、いわゆる「ワークショップ」で表現される一体感とはまるで違う次元の「労働<sup>13</sup>」で生まれる一体感である。

昼の休憩中、車の中で窓を開けて休んでいたら、後ろで女性のボランティアが電話で話している。聞くともなく聞いていると東久留米から来ているらしい。

出雲、東久留米、神戸... 苦小牧なんか近い方だ。

事実上のリーダーさんが、私に手帳とペンを渡し、今日、ここに来ている人それぞれに、住所と名前を書いてくれるように話してほしいという。礼状でも出すつもりだろうか、そんなことまでしなくてもいいのにといいながら回覧したが、苦小牧に帰ってから聞いた話だが、今年は試験的にコンテナでイチゴを作ってみる。売り物にはならないけど、デキが良かったら、お世話になったボランティアさんに送ると言っていたそうだ。素直に感謝して、期待して待とうと思う。

休憩時間に聞いた話だが、ここらでは、近所の人とすれ違っても「大丈夫でしたか？」とは聞けないという。なぜなら、誰が亡くなってるのかさえ分からない状態だから、た

一帯を津波が襲った跡。大物は残っていないが。



稲だと思ふ。地下水を汲み上げて田んぼをやるようだ。



ヘドロに埋もれてもネギは育つ。希望のネギぼうず



<sup>13</sup> 「労働」 = 「お金を稼ぐために働くこと」ではない。

だ微笑んで会釈してすれ違うだけだという。

亡くなった多くの人が、家にモノを取りにと片付けに帰ったときに津波に襲われたということだ。

この近くに保育園があったが、地震が起きて避難所にバスで逃げることになった。第一陣を送り届け、第2陣を迎えに来た時に津波が来た。被災地には自衛隊が最初に入って捜索し、次に警察が来て丁寧に捜索する。でも、見つからない子ども達の親が、もう自衛隊も警察も他の人も探した場所を何回も探しているのを見てた。とても切ないよね、と話す。

終了の時間になり、辺りに集められたガレキの山をみながら、まだまだ終わらないよなあと思いながら別れを告げる。

農家さんは「ありがとうございました」と何度も頭を下げるが、私たちは頭を下げ手を振るが普通の時には言える「頑張って」とは言えない、「身体に気をつけて」「来年は、美味しいイチゴを」くらいしか言えない。

ここでは、いや多くの被災地で、まだまだボランティアは必要だと思う。

VCで終了を報告し、解散する。

昨日とその前は、活動を終えたボランティア向けにお握りが用意してあったが、今日は、まちの有志か支援グループか、味付けの豚バラ肉を炭火で焼いた、北海道で言う豚丼と味噌汁を振る舞っていた。私は帰ったら夕食が用意されているから食べなかったけれど、テントや車中泊のボランティアにはとても嬉しいと思う。

さて、私は、明日から七ヶ浜町に行くことに決めていた。

だから、おおつかさんグループとはこれでお別れである。

最初に、待機所で豚丼を食べているおおつかさんに別れを告げる。おおつかさんも今日で帰るらしい。次に、豚丼を待っている、出雲、土浦、亘理の3人にさよならを言う。

土浦の彼には、「今度、北海道に行った時は苦小牧を素通りしません」と言われ、じゃあどこか案内するねと約束し、笠間の人が見当たらなかったのも、よろしく伝えてと言って別れた。

車に乗り込んでエンジンをかけたら、笠間の人が土浦の人に「あそこに」と指を指されて走って来た。別れ際に「お金と交換しない仕事の大切さ<sup>14</sup>」をお互い感じていることを知った。同じ思いを持っている人は、当たり前だけど、生活している地域を越えてどこかにいる。

そう言えば、土浦、笠間の人とは握手をして別れた。私は、握手は大嫌いだが、差し出された手を戸惑わずに握り返すことができたのは、今回が初めてだ。

---

<sup>14</sup> 脚注13で書いたことと同じく、直接お金（給料とか）と交換される仕事（会社での仕事とか）だけが「仕事」と呼ばれるものではない、給料は出ない料理、育児、洗濯などの家事、町内会の仕事、その他自由意志に基づく社会貢献活動は、それを手を抜かないでやろうとする限り「仕事」と言える。



## 【5日目（5月27日） 七ヶ浜町】

台風が近づいて来ていた。

予定では、28日か29日の午前中まではやって帰ってくることにしていた。

しかし、台風がこのままくれば29日のフェリーがどうなるか分からないし、帰る日の午前中だけやるというのも無理だと判断したので、フェリーを1日早めて予約し直し、28日のフェリーで帰ることにした。

七ヶ浜町の集合時間は8時半から9時ということだが、今は渋滞があることを考え7時50分に白石を出た。

途中、ナビが道に迷い（！！）8時50分頃七ヶ浜町 VC に到着した。

VC は、プレハブではなく、元々体育館らしい、ちゃんとした建物を利用している。

受付と待合所の隣はパネルで仕切られて、米や飲物、物品など支援物資の保管場所になっている。

受付を済ませて待機する。ここは山元町とは違い、9時半になったら責任者の挨拶がありオリエンテーリングから始まる。

また、支援先を決める前にヨガのストレッチを行った。（その場でやるので、ストレッチには狭い）その後、今日の支援要望の件数と内容を紹介していく。

ここは、最初に技能（保母とか保険士とか）や経験（草刈り機などちょっと危険なモノの扱いに慣れているとか）を持っている人から行き先を決めて行き、次に支援先の内容を紹介して（例えば「昼運びがあり、力のいる仕事です」など）、希望者を募って決めて行く。

私は、特になにか技能があるというわけではないから、体力勝負の支援先に手を挙げる。

今回の支援先に向かうの、は私を含め3人で

七ヶ浜町 HP から



倉庫の様子



九州からお米が届けられている。



ある。落ちた瓦やガレガレキを除去し、20枚くらいの畳を移動させるということだ。

必要な道具を積み込み、トラックで支援先へ向かう。前日、軽トラの荷台に数名乗って弁当を買いに行くのを見て「いーなー」と思っていたので（笑）荷台に乗って行く。

七ヶ浜町は、丘の上の住宅地は大丈夫だが下は壊滅的である。七ヶ浜町の親戚は、去年の9月に家を建てたのだが、その時「ここは低すぎる。津波が来たら危険だ」「ここも低すぎる」と言って、今の丘の上に決めたそうだが、大正解だったわけだ。

支援先は海拔8m位だろうか、海岸から100mもない場所である。支援先より少し高いところにある家は、建物は残っていても1階部分はどこも津波にのまれた形跡がある。

支援先の家は、平屋だが天井が高く、柱もしっかりした感じで、見るからに頑丈そうな家で海側や同じ区画の家が基礎しか残してない中でしっかりと残っていた。

「力の要る仕事」と言われて来たが、畳の移動は別の場所でのことで、メインのここは砂に埋まった瓦の破片やガラスその他をさらうことで、そんなに力の要る仕事ではない。もっとも、家の前には、実は砂や海の土（ヘドロというイメージではない）がたまっており、周りに重機やトラックが入った時にそれが踏み固められてしまって普通の土に見えるだけで、これを全て撤去するとしたら、人手がいくらあっても足りないし、重機で起こさないとどうにもならない。

この近くの別なところでは、10人くらいのボランティアが活動していた。見たとこ

ガソリンスタンドは営業してる



丘の上のドームの様な建物の方向にVCがある



支援宅から少し降りて港を望む



る、そんなに違う仕事をしているように見えないから、こちらにもう1人か2人分けてくればいいのかと思った。畳の移動をするのに、奇数というのも具合が悪いし。

支援を求める人からの要望をいかに正確に把握するか、支援活動をいかに効率よく構成するか、人数が充分でなく、さまざまなアクシデントや制約がある中で、VCには非常に高い能力が求められている。

七ヶ浜町では、昼食を取りにVCに戻ることができた。ここは、支援物資が山元町に比べて豊かである。一緒に行動した人の話では、町外にもいろいろつながりを持つ人が多い町で、様々な形で支援物資が届けられて来るのだそうだ。ボランティア向けにカップ麺、飲料水、コーヒー、お菓子までがあったのはびっくりである。

カップ麺好きなので一個いただいたが、自分でおにぎりを持って来ていながらカップ麺を食べてる人はおらず、「あら、これはまずかったかな?」と思って、あわてておにぎりを隠した。

この他、山元町のVCになかったものを挙げれば、ボランティアによる作業用具や自転車の無償修理コーナー<sup>15</sup>が設けられていたこと、ゴム手袋の等の貸出しがされていたこと（洗って返す）、プレハブの喫茶店（コーヒーのみ。もともと事務所かなにかとして利用されていたよう）があったことなどである。

午後からは、まず、畳の移動にとりかかる。ある家の外に積まれてあったものをトラックの荷台に載せるのだが、海水を吸った畳は重く、そしてカビでとても臭い。また、表面は乾いているので、細かな砂が舞ってなかなか大変である。

誰かが置いた北海道土産。一見木彫り、実はプラ



ボランティア受付



待機スペース（裏側が支援物資の保管場所）



<sup>15</sup> 宮古に行った人の話では、宮古のVCにもあったとのこと。あまり大きな面積でなかったり、車両の多くがダメになった自治体では、よくあるかもしれない。

畳を載つけるとき、地元と近郊から来ている2人が「めっさ、重いよこれ」と言う。

「？」と思い、聞いてみる。

「『めっさ』って、こっち（北海道って言うてある）で言う『なまら』のこと？」

「そうそう」（3人爆笑）

窓から家の中を覗くと、人はいないが、泥にまみれたポケットアルバムを広げ、写真の汚れを取り乾かしている作業をしていた様子が分かる。室内の多くのものが流された様子で、貴重な思い出のものなのだと思う。

流された写真を集め、洗浄するボランティアグループができたと聞かすが、そういう活動もとても重要なんだと思う。

畳を積んで移動先へ運ぶ。指示された場所は、たぶん水田だったと思われる場所である。もともと水はけが悪いから海水が残っているのか、辺り一面水浸し（沼のよう）で、その中に建物の残骸、家具、漁具、農機具、ありとあらゆるものが散乱している。

その辺りの乾いた場所に畳を置く。丘の上こういった残骸の処分場があったから、この辺りを片付ける時に一緒に持って行くためにここに持って来たのだろうが、でも、んだか残骸を増やしに来たようで複雑な気分である。

もう一度、午前中の支援先に行き作業を続ける。3人ではやはり、家の裏側までは手が回りそうにないので、正面部分をできるだけキレイにすることに決める。

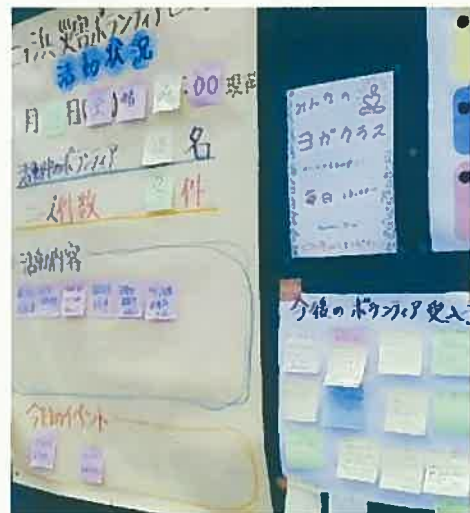
ここは、4時までにはVCに戻ればいいので3時半過ぎまで作業をし、被災者の方に確認してもらって帰路に着く。

被災者の中には「細かい仕事が多いから、女性に来て欲しかったのに」などと言う人

支援先やイベント等の情報



支援先やイベント等の情報



残骸等の処分場（同じ量の残骸の山が左にある）



も居ると聞いたが、そういうケースは稀だから話題になるので、どこに行っても本当に感謝される。

今日、行ったところも、3人ともまだまだ片付いてないと思っていたし、ひょっとしたら被災者も満足していなかったかもしれない。

でも、お互いに状況が分かっているから「キレイにしきれなくて申し訳ない」「でも仕方ない」「もう少しやってもらえなかったかな」「でも、やっぱりありがたいよな」という気持ちを察して「ここまでしかできなくて...」「いいえ、本当にありがとう」というふうに別れられるのだと思う。

さて、七ヶ浜町では、VCの前のスペースと丘の児童公園のスペースに仮設住宅が建ち始めていた。

一日も早く、各被災地の人々が落ち着いた生活ができるように願う。

そして、これからも自分のできる方法で「挨拶の魔法」のキャラクターはどこでも人気だった。被災地の復興に役立ちたいと思う。

丘の上から見た市街地



七ヶ浜町の仮設住宅（4軒長屋 左半分）



VCの入り口。ACジャパンのテレビCMで話題になった



## 2 支援先の自治体の状況

### (1) 被災地の状況

石巻市	人口	163000	死亡	3000	行方不明	2800	面積	555	震度	6
山元町	人口	16000	死亡	660	行方不明	90	面積	64	震度	6
七ヶ浜町	人口	21000	死亡	62	行方不明	12	面積	13	震度	5

※ 数字はおよそ。

※ 人口は 23. 2. 1 現在。

※ 死亡及び行方不明人数は各自治体 HP23. 6. 2 データ。

※ 面積単位 km<sup>2</sup>。

※ 震度は気象庁発表)

### (2) ボランティアの 1 日当たりの受け入れ状況 (5 月 23 ~ 27 日)

石巻市	500~600 人	石巻市ボランティアセンターブログから
山元町	70~120 人	山元町ボランティアセンターブログから
七ヶ浜町	不明	(一緒に行動したボランティアの話では 50 人前後?)

## 3 ボランティアセンターについて

### (1) ボランティア活動時間

9 : 00 ~ 16 : 00 (または 15 : 00)

※自治体の広さや交通状況、自治体の体制などによって違う模様

受付は、早いところで 8 : 30 から。

受付終了は、9 : 30 ~ 13 : 00 まで、午前午後の部を設けるところもあり多様。

終了時間が早いのは、以下のような事情が考えられる。

○交通障害 (信号機の故障、停電による不点灯など)

○交通渋滞

○VC 職員の業務 (業務報告、連絡調整等、ボランティア解散後の業務)

○ボランティアの消耗

### (2) VC から支援先への交通用具

VC から近いところに支援先がある場合は、徒歩や自転車を貸し出す場合もある。車でいかななくてはならない場合は、公用車が手配されたり、ボランティア自身の車で分乗していく場合もある。

### (3) ボランティア保険

例えば、宮城県内はどここの自治体でも適用される保険を最初に行った VC で加入。

1 口 100 円で自治体負担、1 年間有効。

### (4) 作業用具

山元町、七ヶ浜町、ともに行き先のニーズに合わせて、自分たちで道具を選び運ん

で行く。使い終わったら、自分たちで洗浄し数を確認して返却する。なお、洗浄は、山元町では派遣先、七ヶ浜町では用具置き場のそばに洗い場があった。

(5) 運営上のポイント（ボランティア側からの視点）

○VC 職員が笑顔でいること。

○支援先のニーズと状況を的確に把握し、ボランティアに伝えること。

○ボランティアの主体性を尊重するとともに、指示は的確にすること。

○宿泊、風呂、イベントなどの情報を表示すること。

○被災状況や他の自治体他様々な主体との協力状況を表示すること。

○ネット上で、被災地の状況の他、ボランティアの服装や装備品、その他 Q & A などの情報を発信しておくこと。（相手の立場に立った情報発信が、結局は発信者の手間を省くことになる）

(6) VC の場所及び問い合わせ先

役所（場）が被災しているところも多く多様。

詳細は各県のボランティアセンターまたは社会福祉協議会の HP にアクセスして確認する。（もしくは電話問い合わせ）

(終)